

成蹊會誌

第五號

所 感

同窓會實務學校 文傳正夫

私が此度身に餘る大役を引受けた理由は、餘りに單純な個人の感情によるものであつて、筆に上せるさへおはぶかしい次第である。

人はよく我が母校と云う。が、そもそも母校の何に懐きさを感じるの

であろうか。學校のある土地の風物か、毎日暮した校舎の建物か、机や椅子か、學校へ通う道か、昔教はつた先生方の今も居られる事か、いやそれともそれ等の一つになつた漠然とした感じ、であるかも知れぬ。

然し、私にとつては事情はまつたく違ふのである。母校とは言つても恩師は中村先生はじめ既に幽冥境を異にされた方もあり、或は御健在であつても他に去られて今はどなたも居られぬ。私達の學んだ校舎は他人の手に渡り、學園も池袋から吉祥寺へ移つてしまつた今となつては何を懐しむものがあろう。

此の事は私ばかりでなく、更に俗世間的な色々のいきさつによつて感情的に學校と疎隔した友人達の間でもよく聞くし、これも偽らざる感じであらう。

然しそれにも不拘、私は成蹊に惹かれるものがある。それは今は亡き恩師中村先生の思ひ出である。三十五年前に朴齒の下駄を引づり

しい眼を細めて、褒めて下さるであらうと思つたからで、その外の何の爲でもない。

今の成蹊の教育方針とか先生の御理想とかについては直接には何も知らないし、又門外漢の私など言ふべき事は何も無い。すべてを擧げて先生方にお任せすべきである。

然し、若し幸に私のハンブルな願

「學校法人成蹊學園」と成蹊會

參議院議事部長 河野義克

(都商事株式會社事務取締役) 實務學校三回卒業

昨春私立學校法が施行せられたが、これにともない「財團法人成蹊學園」も「學校法人成蹊學園」と變更し従つて寄附行爲も私立學校法の規定に則つて改正せねばならぬこととなつた。學園としては昨年來この改正のために種々努力をせられ今春その事を了し認可を得て登記も完了した。私も依囑を受け新寄附行爲の起草等些かの御手傳をした關係上編集者の命によりこの「學校法人成蹊學園寄附行爲」のうち成蹊會に關係ある部分につき若干の解説をこゝらみた。

凡そ私立學校は歴史を閲すればする程主として卒業生により維持發展せしめられるべきことは建學の精神が尤も良く卒業生の心理に體得繼承されていであらうことから言つても當然であり、これを早慶等舊い歴史を有する私學の實際について見ても明かである。この故に私立學校法が新に私立學校の機關として評議員會を規定した際に卒業生を初め法律上のものとして扱ひ卒業生(二十五歳以上の)からも必ず評議員を選任することにしたのは理由のあることである。のみならず理事會につい

ひをお聞き届け下さるならば何卒私の生涯にとつての中村先生の如く、現在の生徒にとつての第二第三の中村先生になつていたゞき度い、と未卒業生として謹んでお願いする次第である。

でも評議員會からも必ず理事を選任することにしたので實際問題として評議員を通じて理事にも卒業生がなることが法律上豫想されていると言ひ得るであらう。

これを成蹊學園の新寄附行爲によつて見てみよう。先づ評議員會であるがこれは簡単に言えば理事會の諮問機關であり四十一人以上の評議員で組織する。評議員は私立學校法の規定にもとづき、各學校の職員會議で互選された者二、この法人の設置する學校の卒業生(從前の財團法人成蹊學園の設置した學校の卒業生を含む)の組織する同窓生團體において互選された者(但し滿二十五年以上である)を要する。三、この法人關係の功勞者學識経験者及び父兄の内から理事會で選定された者、各號に掲げられる者を選定された者、別定の定員數は理事會で定めることになつてゐる。先日の理事會では教職員からの者十二人同窓生からの者十二人、その他十七人以上と決定したそうである。

次に理事會は學校法人の意思決定機關であり、執行機關でもあるが、二十人の理事をもつて組織し、その

理事は一、學園總長及び大學學長二、大學學部長及び各學校長のうち理事會の定められた者、三、評議員のうちから評議員三分の二以上の多數をもつて推薦された者、四、その他理事長が推薦し理事の三分の二以上の同意を得た者、以上の各號の者を以て充て、その各號別の定員數は理事會で定めることとした。これも先日第一號一人、第二號二人、第三號八人、第四號九人と決定したそうである。この場合評議員で推薦せられる八人については實際上は他を構成する教職員、同窓生その他(父兄)に適當の割合で割當てられることとなる。又第四號によつて理事となる者のうちに同窓生が入ることも考えられるので全體としては四名程度の理事が卒業生のうちから出ることとなるであらう。

「同窓生團體」と言ふのは取りもなおさず成蹊會のことである。成蹊會の普通會員は會則第五條によれば成蹊園、實務學校、中學校、小學校、實業專門學校、高等學校舊制、高等學校新制及び大學の出身者(當該同窓會の承認した中退者を含む)であるが、さきに故中村園長胸像設立の際初めて相連合した各學校同窓會がその後幾多先輩の努力と谷岡君等の獻身的奉仕により大合同を實現し單一の成蹊會を組織し得ていた事は私立學校法のもとこの新制度を運用するためにも甚だ慶賀すべき事であつた。成蹊會は六月の定例会において學校法人の評議員を互選したが、會則第一條に「本會は會員相互の親睦をはかることと成蹊學園を後援することを目的とする」と明記してゐる成蹊會の責務はいよゝ重要となつたと言ふべきであらう。同窓生各自としても母校の充實發展をひたさないが、それがつてゐる事は申すまでもないが、そのためには先づ我々の組織する成蹊會の活動を活潑にして一體としてのその作用を通じて懐きき母校の興隆を期すべきものである(高校六回卒業)

成 蹊 學 園

新校舎の設計について

東京大學助教 吉 武 泰 水

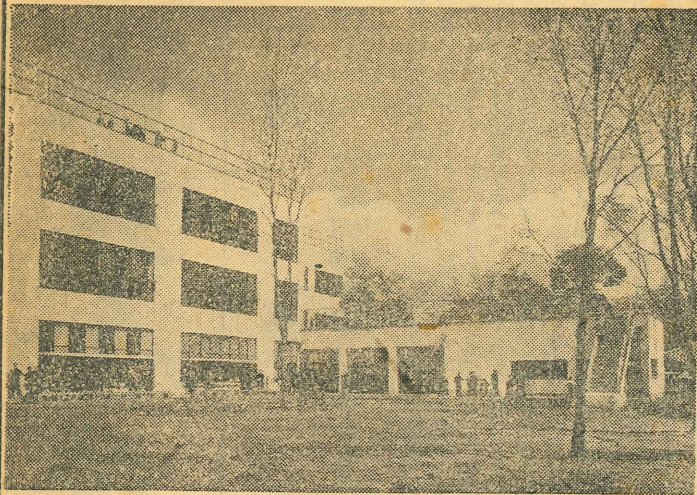
建物には實に多くの人々の努力の集積であります。資金を用意された人、工事を擔當された人、工事の運びに關係された人等。この設計は學園の建築委員會が擔當し、小野薫・高山英華兩先輩の御指導で私共が圖面をかきました。

教室(特に一階)の取扱、特別教室の配置、床材料などは新しい試みで目につくものですが、ほかに一寸氣の付かないような點にも相當苦心しています。尤も新しい試みで資金の點や、未經験の不安のために手控えたものもあります。一番心配した屋上の防水と外窓サッシは先生方や先輩の御努力で現下では最良といえます。

しかし他面明かに考の及ばなかつた點もあり、日々建物をつかう方々に不自由や迷惑をおかけしていることも少くありません。之等は當然私の責任であります。不満を漏らされても、資金の裏付けのない爲困る場合もあります。

今度の小學校々舎にはこんなことのないよう充分注意を拂つて設計してをります。倍舊の御支援をお願いいたします。(七・二〇)

(高校九回理科卒業)



成 蹊 學 園 新 校 舎

設計 成 蹊 學 園 建 築 委 員 會
施 工 株 式 會 社 藤 田 組

昭和二十五年年度

成 蹊 會 報 告

成蹊會幹事 谷岡喜久藏

戦後混沌より秩序を求めつゝ、成蹊會も六年間に亘る空白時代を経て再發足したのは昭和二十一年も秋の頃であつた。爾來四年有半の歲月は困難を伴ひ且つ遅々たる歩みではあつたが曲りなりにも今日の成蹊會を形成したのである。中村先生の教育理想に則り、建學以來四十年、大家族主義を標榜し、特色ある成蹊會とに彩られつゝ、星霜は移り、その師その校舎を失ひ、或は生活環境を異にし、特異な立場をとつていた諸學校、就中實務學校、専門學校、中學校、高等學校等を、糾合することとは容易な業ではない。にも拘らず諸兄の相互信頼と學園の將來を思ふ情熱に外ならない。

さて漸進的な内にも着實な歩みを續けている成蹊會二十五年年度の活動について一瞥し度い。成蹊會の目的は會則第一條に明かな如く『本會は會員相互の親睦をはかるとともに成蹊學園を後援することを目的とする』のであつて政治結社でもなければ利益社會でもない。前段の『會員相互の親睦を圖る……』については東京に於いて從來通り二月二十一日の枯林忌、盛夏のビールパーティ、クリスマスダンスパーティの集いを催し、毎回百名乃至三百名内外の會員が參集して東京本部の三大行事となつてゐる。この外成蹊學園に於いても招待状を發送し、當日は後輩の學生諸君と共に楽しい一日を送つてゐる。又成蹊會を運営する委員會、委員長會談等はその必要に應じて開

催されてゐる。かくして東京本部に於いては會員數も多く、比較的集會の機會に恵まれていたが、全國に分布されてゐる地方會員に對しては僅かに會誌、名簿によつて成蹊會活動の一端をしかも一方的に通知するのみであつた。これが爲地方支部結成を痛感し、尤も各地方に於て從來其小規模の同窓會があつた一丹羽會長と私とが昨年十月には名古屋、京都大阪、博多を歴訪し夫々、九州支部關西支部、東海支部の發會式に出席し、本年四月には東北地方に旅行し、秋田、仙台の同窓諸氏と會合する機會を得た。一方千葉に於いては千葉醫科大學出身者を主として本年五月海道札幌に於いても本年二月二十一日の枯林忌を期して北海道成蹊會を催した。この間の詳細は會誌第四號及本號の地方支部の記事を参照され度い。こゝに於て特に述べ度い事は支部結成に當つて各地方在住の幹部が率先支部會結成に努力された事を衷心より感謝すると共に今後共成蹊會の一翼として育成發展される事をお願ひする次第である。と同時に東京本部に於いて、會誌を充實し以て會員相互の意思の疏通を期し、名簿を正確にし以て會員の所在を明かにすべく努力する次第である。

次に本年度成蹊學園諸學校一中小學校、中學校、高等學校、大學一の入學者中従前に比して卒業生の子弟が多數入學した事を特記し度い。即ち成蹊學園學生々徒兒童の名簿を通覧するに從來卒業生の子弟は寔に多々たるものであつた。尤も高等學校卒

業生は年齢的に若い關係上、一方實務、中學、専門の諸學校卒業生は現學園と比較的疎遠が原因であつたらしいが、とにかく卒業生がその子弟を母校に托する現象は喜ばしい事である。勿論母校學園は諸學校共志願者は定員數を突破し、選拔試験は厳正を極めてはならず、學校當局に於いて私立學校に於ける卒業生の立場を認識し、その子弟入試に當つて特に考慮されたのではないかと思ふ。かくて學園と卒業生とを結び紐帯がより強められる。

第二に成蹊會の目的の後段『成蹊學園を後援する』については上述の通り成蹊會の結成日淺き折柄、現在の成蹊會として學園が期待する程後援が出来ないのを残念に思ふ。さり乍ら成蹊會として學園の持続は一時的斷片的でなく、長期的の持續である。しかも時間の経過と共に上昇カーブを辿る事は豫想出来る。曩に學園新校舎建築資金募集に際し、僅かではあつたが會員有志の獻金があつた。これ卒業生が學園に對する密附第一號である。現段階に於ける卒業生は單に物質的ばかりでなく、その持つる能力を提供してゐる事を見逃してはならない。即ち私立學校法施行に伴う學園密附行爲改正に關して、新校舎建築の設計監督に當つて、夏に學校に於ける醫師、水泳師範の派遣に際して、來年三月成蹊大學卒業生の就職についてこれ等は近々の事例であるが、學園の委嘱を受けて協力してゐる次第である。一方學園の組織内には成蹊會より常務理事一名理事二名、維持會常任委員四名を出し、近く評議員十二名を送らんとしている。

過去一年を回顧して成蹊會と成蹊學園とは上述の通り相從携しつゝあるが、その間誤解や摩擦は無しと雖も、鳥の如くにならなければ私立學校は決して發展せず、その卒業生團體たる成蹊會も充實せずという事を銘記しなければならぬ。